

「あ、大丈夫です。臨也さんが性格悪いとか女癖悪いとか最低な人だとか、ちゃんとわかってます。だまされてないです。ご心配ありがとうございます。それじゃ」

言うだけ言って、臨也の腕を握るとそのまま全力で走り出す。

本気で静雄が追ってくれば逃げられないだろうとわかってはいたが、どうやら見逃してくれたらしい。帝人の言葉に心底驚いた様子だったから、呆然として体が動かなかつたのかもしれない。ともかく、助かった。

(良かった……！)

心底そう思う。静雄に追われた場合、それでも臨也なら逃げられるだろうが、自分の身体能力では絶望的すぎる。

「あのさあ、帝人君。シズちゃんにあんなこと言って殺されたらどうすんの？」

臨也は、といえば、帝人よりよほど重い荷物を持っていたはずなのに、息を切らすこともなく平然としている。帝人が腕を引いた時は少しだけ驚いた表情を見せたけれど、今はどう見てもいつもの、余裕の溢れた彼だった。

「その可能性は低いかかって思いました。基本、良い人らしいですし」

セルティと新羅、共通の友人でもあるので、時々静雄の話は聞いていた。

それによると、静雄は基本、善良と言って良い人間だ。ただし、多少切れやすいらしいのでそのあたりだけを気をつければ良い。

先ほどの帝人の発言は静雄にとって怒るよりも驚きの方が大きかったはずで、——なにしろ高校生男子、それも友人の友人が折原臨也の恋人になったと知れば、普通は驚く——つまり切れていない。なので殺される可能性は低い。

「ふうん。っていうか、帝人君、結構俺について酷いこと言ってたよね？」

「え、酷くないですよ。全部本当のことですよ。それより、喧嘩なんて売らないでください。怪我とかしたらどうするんですか」

性格はあまり良くない、つまり悪いし、つきあっても平均一ヶ月しかもたないなら女癖も悪いと言えるし、帝人が金に困つてると見越した上で恋人ごっこをしないかと提案するあたり、最低と言える。

(うん、やっぱり全部事実だよな)

「……それは保身で言ってるのかな。それとも、俺を心配してくれてるのかな」

「もちろん、心配してます」

なぜそんな、あまりにも当然のことを問うのだろう。怪我したら心配するし手当だってするだろう。けれど、怪我はしないですむならその方が良いに決まっている。……

……ただし、帝人の中では自分にとっての正当性があり、理由があれば自らが手を下すこと、その結果自らが怪我すること、にためらいがないだけだ。現状はそれに当てはまらないので、それは普通に心配する。